

同一性と親密性の危機の解決における性差

—自我同一性地位の Rasmussen の EIS による併存的妥当性の検討—

高橋 裕行*

SEX DIFFERENCES IN THE RESOLUTION OF IDENTITY AND INTIMACY CRISIS
—An Examination of the Concurrent Validity on Ego Identity Status by Rasmussen's EIS—

Hiroyuki TAKAHASHI

The first purpose of this study was to examine the concurrent validity of Ego Identity Status by using self-reported measure of Rasmussen's EIS. Its second purpose was to investigate sex differences in the resolution of identity and intimacy crises. Method: An EIS was first administered to 68 male and 66 female university students. Subjects were categorised as high and low in ego identity on the basis of EIS scores as follows: high if their EIS score was greater than third quartile, and low if their EIS score was less than first quartile. A semi-structured interview of ego identity and intimacy was then done to 15 male and 15 female students who were categorized as high, and 15 male and 15 female students considered as low. Results: In both sexes, more subjects classified as high than subjects classified as low were in the higher identity statuses. In all areas except sex role, male and female demonstrated similar patterns of identity crisis resolutions. More females than males were in the higher intimacy statuses. More male than female were associated between identity and intimacy crisis resolution.

Key words: Identity status, intimacy status, concurrent validity, sex differences.

自我同一性対同一性拡散, 親密性対孤立は, Erikson (1956) が青年後期から成人初期にかけて優位となる心理社会的な危機解決の両極的な所産について論考したものである。Erikson は, 人生周期における自我同一性対同一性拡散の段階を, 職業的, イデオロギー的傾倒 (commitment) を促進する時期, 親密性対孤立の段階を, 自分が有意な犠牲や妥協 (1963, p263) を必要としても自己を他者との提携 (affiliation) や協力関係への傾倒を促進する時期と考えている。

自我同一性に関する研究は, ここ20年, Marcia (1966) の半構造的な面接 (同一性地位面接) を通した同一性地位のアプローチによる検討が優位となってきている。同一性地位のアプローチは, 同一性危機の解決のプロセスに伴なう危機 (crisis) と傾倒の心理社会的な2つの基準の組み合わせにより, 各人を質的に異なる4つの同一性地位のいずれかに位置づけるものである。このアプローチは, 旧来の質問紙法のQ分類などに示される同一性次元のアプローチが同一性に込めた人生の危機への対処様式を考

察した Erikson (1956) の含蓄を十分に反映させていないとの批判から考案されたものである。同一性次元のアプローチとは同一性達成と同一性拡散とを両極とする一次元的連続体を想定して, 各人が持つ同一性危機の解決に伴なう諸特徴の程度により, この連続体に位置づけるものである。

Marcia の危機と傾倒の考案は, 同一性形成過程の力動的な側面を積極的にアプローチする方法として多数の研究を誘発してきている。多くの研究は, 同一性地位面接の内容的妥当性や, 同一性地位の構成概念的妥当性, 信頼性などを検討しており, 近年, これらの研究を展望した論文が公刊されているが (Bourne, 1978; Waterman, 1982; 高橋, 1984), 共通に, 同一性地位の併存的妥当性を検討した研究が著しく少ないと指摘している。僅かに, Adams et al (1979) は同一性地位のアプローチの枠組みの中で, 質問紙 (Objective Measure of Ego Identity Scale) を作成している。彼らは4つの同一性地位それぞれを表わす6項目, 計24項目からなる尺度を作成し, 再検査法による信頼性や同一性地位面接による併存的妥当性, 予測的妥当性を検討している。地位面接と彼らの尺度とに

* 福井大学 (Fukui University)

よる同一性地位の比較は、類似しているが同一ではなく、この尺度が面接での評定によるモラトリウムと同一性拡散とを十分に識別しないことを示している。彼らの検討方法は、同一性地位の評定基準が用いられた標本により変動することや、定義された評定基準によるモラトリウムの者の大量出現、論理に疑問を抱かせる安易な移行地位の設定などの問題が残る。加藤(1986)は、同一性地位面接の併存的妥当性の検討の重要性を指摘し、同一性確立あるいは同一性混乱の特徴が記述された同一性次元の質問紙を作成し、これと自ら作成した同一性地位のアプローチの枠組みの中の質問紙(1983)との併存的妥当性を検討している。しかし、両尺度はともに質問紙であり、検討課題の要諦となる同一性地位面接による同一性地位の評定が行われていなく、一種のトートロジーを形成している。そこで、本研究の第1の目的は、同一の対象に同一性地位面接と同一性次元の質問紙を実施し、同一性地位アプローチの併存的妥当性を検討することである。

本研究の第2の目的は、同一性と親密性の危機解決に関する性差の検討である。Erikson(1968)は親密性発達における同一性の役割を強調し「真の他者との提携は、堅固な自己画定の結果であり、検証でもある」と述べている。親密性は、Orlofsky et al(1973)がEriksonの理論から抽出した3つの基準により、構成概念の操作的定義を試みている。第1の基準は、同性、異性との親密な関係の有無であり、第2は、継続する傾倒した性愛的な関係の有無であり、第3は、仲間関係の深浅である。彼らは、半構造的な「親密性地位面接」(intimacy status interview)を行うことにより、これらの基準の組み合わせから、親密性(intimate)、前親密性(preintimate)、ステレオタイプ(stereotyped)、偽親密性(pseudointimate)、孤立(isolate)の5つの「親密性地位(intimacy status)」を導き出している。親密性地位の概略は、以下の通りである。親密性の者は、同性や異性の友達と深い、開かれた関係を形成し、異性との継続する傾倒した愛情関係に参与している。前親密性の者は、傾倒する異性との愛情関係にアンビバレントであることを除き、親密性の者の友人関係と似ている。ステレオタイプの者は、継続した複数の同性や異性との友達関係を持つが、これらの関係は個人的なコミュニケーションが少なく、表面的である。偽親密性の者は、継続した異性関係を持つが、深い感情の共有や自己解放というより、慣習的な役割に規定され、同性との関係はステレオタイプと同じである。孤立の者は、偶発的に出会う知己を除き、仲間との個人的な関係を欠いている。親密性地位の構成概念的妥当性は、親密性や前親密性の男子が偽親密性やステレオタイプの者よ

り対人関係の認知(Orlofsky, 1976)や、情感の認知(Orlofsky & Ginsburg, 1981)などの測度で高得点することで検証されている。

MarciaとOrlofsky et alとが、それぞれ、同一性地位と親密性地位とのアプローチを提唱して以来、多くの研究は、主に男女大学生を対象に、同一性や親密性の危機解決を検討している。これらの研究の実証的知見の中で明らかにされてきている重要な問題の一部として、いくつかの性差に関する問題が挙げられる。第1は、男女間で同一性地位の相対的な適応性の位置づけが異なる可能性である。第2は、男女間でEriksonの人間発達漸成図式における同一性危機と親密性危機との発達の経路が異なる可能性である。第3は、男女間で重要とされる領域が異なり、親密性地位を予測する領域が異なる可能性である。

第1の問題は、男性では、同一性達成とモラトリウムとが相互に類似して一群を、早期完了と同一性拡散とが一群を構成し、両群間に多くの従属尺度で差異が見出されている。しかし、女性を対象とした研究のいくつかは、同調性や場の依存性、制御の所在性(locus of control)、専攻の難易性、不安、自尊感情などの従属変数を検討し、男性と異なる結果を示している。これらの研究は、女性のみを対象として、早期完了は適応的であり、モラトリウムは適応的でない結論している。最近の研究は、Orlofsky(1978)の批判を受けて、男女の標本を、同時に、同一の母集団から抽出する手続により、モラトリウムの女性が同一性達成の女性と比肩する高いパフォーマンスの結果を得ている。Orlofskyは、男女大学生を対象に、達成動機を従属変数として同一性地位の性差を検討し、達成動機は男女とも、同一性達成やモラトリウムの者が早期完了や同一性拡散の者より高い結果を得ている。Ginsburg & Orlofsky(1981)は、パーソナリティの深い層を測定するLoevingerの自我発達測度を用いて、モラトリウムの女性は早期完了の女性より自我発達の高い段階である「良心的段階」の者が多いことを見出している。Read et al(1984)は、複雑な状況での他者への影響行動様式を検討し、同一性達成とモラトリウムの女性は、多大な情報処理能力が高く、影響行動も置かれた状況の勘案を指摘し、精力的に言語的に訴えるが、早期完了の女性は多様な認知の分析・統合の能力が最も低く、影響行動も権威的、操作的(報酬の分与)であることを明らかにしている。

第2の問題は、男女間での同一性や親密性の危機の発達の経路が異なる可能性である。Erikson(1968)は、男性が同一性危機の解決後に親密性危機に向かうが、女性

は同一性危機と親密性危機との解決が並行すると仮説している。Josselson (1973) は、事例の検討により女性の同一性形成が親密性形成の過程と並行しているという印象を受けると述べ、女性は同一性の強化と親密性の深化とに相互性があるとしている。Schiedel & Marcia (1985) は、男性では同一性地位と親密性地位との間に有意な連関があるが、女性では有意な連関が認められないことを示している。高橋・関口 (1986) は、女子大学生を対象に全体的な同一性地位が高くとも、親密性地位が高いとは限らないという結果を得ている。しかし、芳川・園田 (1985) は女子大学生を対象に自我同一性の高い群が親密性地位も高いことを見出している。

最後の問題は、前提として、領域間の同一性地位の評定が全体的同一性地位の評定に収斂されるのではなく、保たれるということである。同一性地位面接を用いた研究の多くは、3領域の同一性地位を総合して1つの全体的な同一性を決定してきている。Erikson (1956) は、自我同一性の発生論の中で、同一性を成人以前の全ての同一性の止揚的性質を荷った分割を許さないゲシュタルトとして考えている。Matteson (1977) は、領域間の同一性地位を総合的に評定した全体的同一性地位が何を意味しているのか不明であると指摘し、同一性を各領域の同一性地位プロフィールとして検討することが研究に生産的であると考えている(全体的同一性地位と領域間の同一性地位との関連については、考察において論考する)。領域別に同一性地位を検討した研究は、必ずしも多数行われていないが、性差を中心に問題点を整理すると、以下の2つの問題に下位分類される。(1)男女間で重視される領域が異なる可能性、(2)男女間で重視される領域での同一性の確立が親密性達成を最も予測する可能性、などである。領域の性差の検討に伴う2つの問題は、最初に同一性地位を検討した Marcia & Friedman (1970) のストラテジーの中に、既にその萌芽が認められる。彼らは、Erikson の唱える、女性は自らの同一性を男性との関与を通じて現わすという考えに基づいて、旧来の同一性地位面接の領域に婚前交渉を加え、女性は婚前交渉の領域での同一性危機解決が重要と考えている。1つ目の問題に関して、Schenkel & Marcia (1972) は、女性のみを対象に、領域別の同一性地位を検討している。彼らは、婚前交渉の領域での同一性地位が他の領域での同一性地位より従属変数の分散を最も予測し、ついで宗教の領域での同一性地位が予測するが、職業や政治の領域での同一性地位は予測性が低いことを見出している。Waterman & Nevid (1977) は、男女大学生を対象に、女性が男性より婚前交渉の領域で、男性が女性より職業の領域で、それぞれの

同一性危機を体験していると仮説して検討を行い、前者の仮説が支持され、後者は支持されなかった。女性は、婚前交渉の領域で危機を体験している者が多く、同一性達成と早期完了との2峰分布を示すが、男性は危機を体験している者が著しく少なく早期完了が多いことを見出された。Matteson は、Marcia & Friedman (1970) の婚前交渉の考えでは著しく限定されてしまうことを批判し、関連する幅広い性役割への考え方に代えている。彼は、さらに宗教を価値観に代え、デンマークの男女高校生に面接を行っている。結果は、男女とも、性役割と価値観の領域で高い探索と傾倒が認められ、この2領域での探索と傾倒がパーソナリティ諸変数の分散を予測している。Hodgson & Fischer (1979) は、旧来の3領域に、婚前交渉と性役割の領域を加えて領域別の同一性達成度の性差を検討している。結果の処理に際して、旧来の3領域で高い同一性地位にある者を「男性型経路」、婚前交渉と性役割の領域で高い同一性地位にある者を「女性型経路」、5領域でいずれも高い同一性地位にある者を「アンドロジニ型経路」と分類している。結果は職業や政治、宗教において男性が女性より、婚前交渉や性役割において女性が男性より高い同一性地位の者が多い。Waterman (1982) は、婚前交渉や性役割の領域を含む研究を通覧し、研究の数が少ないため結論を保留しながら、性的行動・態度の領域において男女間に同一性危機の解決パターンが異なる可能性を示唆し、これを除く他の領域においては、男女が同様の同一性危機の解決パターンを経過すると述べている。

下位分類による2つ目の問題は、領域別の同一性地位と親密性地位との関係性についてである。この関係性を最初に実証的に検討したのは、Hodgson & Fischer (1979) である。彼らは、同一性地位面接と親密性地位面接を行い、同一性と親密性の性差を検討している。男性型や女性型、アンドロジニ型などの経路に加えて、いずれの領域でも低い同一性地位にある未分化型の4群に分け、親密性地位との関係を検討したところ、男性ではアンドロジニ型の者が他の経路の者より高い親密性地位(親密性と前親密性)にあるが、女性では未分化型を除く経路間で高い親密性地位の者の分布に有意な差異が見出されていない。また、女性は男性より高い親密性地位にある者が多い。これらの結果は、男性では全ての領域での同一性危機の解決が親密性獲得の前提になるが、女性では親密性危機の解決が同一性危機の解決と並行する可能性を示唆したものである。Kacerguis & Adams (1980) は、Schenkel & Marcia (1970) に従い、女性の同一性危機解決が男性と比較して職業や政治より対人関

係の確立や維持と関連する提携 (affiliation) に依拠しているため、宗教の領域での同一性地位が親密性地位を予測すると仮説しているが、結果は仮説が支持されず、男女とも職業の領域での同一性地位が親密性地位を予測している。これに対して、Fitch & Adams (1983) は同一の仮説を用いて、仮説通りの結果を得ている。しかし、両研究とも、親密性の展開と関係して重視されてきている性役割の領域を含めて検討していない。Tesch & Whitbourne (1982) は、親密性の危機に直面していると考えられる、平均年齢25歳の大学卒業生を対象に、領域別の同一性地位と親密性地位との連関を検討しているが、男女込みにして結果を報告しているため性差が明らかでない。このように、性差を中心に領域別の同一性地位と親密性地位との関係を検討した研究は、各領域の同一性地位を経路に統合している、性役割の領域を含んでいない、性差の検討を行っていない、などの問題があるため、未だ決定的な結果は見出されていない。

本研究では、同一性地位面接と自我同一性の質問紙を同一の対象に実施し、同一性地位概念の併存的妥当性を検討することを第1の目的とする。その際、妥当性の問題を明瞭にするため、自我同一性の質問紙の得点の中位の者は除外した。あわせて、性差について包括的に検討するため、各領域の同一性地位と親密性地位の特徴、各領域の同一性地位と親密性地位との関連をあきらかにすることを第2の目的とする。

方 法

1. 被面接者

被面接者は、同一性の危機のみならず、親密性の危機にも直面している可能性が高いと考えられる、3・4年生の男女それぞれ30名、計60名である。男女各30名は、男女それぞれ、70名弱の集団のなかから、後述する Rasmussen (1964) の質問紙 (Ego Identity Scale : EIS) の総得点により低群 (第一四分位数以下の者) 15名と、高群 (第三四分位数以上の者) 15名の者が選ばれている。

2. 測度

同一性地位面接 地位面接では、領域の選定にあたり、Matteson (1977), Waterman & Nevid (1977), 無藤 (1979) を参考に、宗教を価値観に代え、性差の検討のために性役割を加え、職業、価値観、性役割の3領域とした。同一性地位の評定は、Matteson の「探索と傾倒における4段階評定」に準拠し、領域別の地位判定後、全体的同一性地位を決定した。全体的同一性地位の評定を客観的に行うため、無藤に倣い、微妙なニュアンス (地位の移行過程にあるとみなしうる場合) を評定に反映させる必要

がある場合、副評定を添えた。全体的同一性地位評定は、「危機と傾倒」と「主評定と副評定」に基づく3領域の単純合計としてある程度自動的に決定された。

評定の信頼性は、2名の独立した評定者間の一致度によって検討した。評定者の1名は筆者であり、他の評定者は筆者が2年間同一性地位や親密性の構成概念を指導してきた学部生である。評定の一致した割合は、82.8%であった。先行研究と比較して、比較的高い一致率といえる。評定が不一致の場合、評定者間で一致が得られるよう合議し、最終的には主評定者 (筆者) の評定に拠って分析を行った。

自我同一性の質問紙 Rasmussen (1964) は最も使用頻度が高く信頼性が高い (Waterman, 1982) とされている EIS を考案している。EIS は、Erikson の発達漸成図式のI段階からVI段階までの意味内容に基づいて質問文が構成された、各段階12項目の計72項目からなる質問紙である。平野・宮下 (1981) は EIS の邦訳を試み、折半法による信頼性の検討を行い、高い相関係数を報告している。本研究では、平野・宮下が邦訳した尺度を用いたが、訳が硬く意味が通りにくい質問文は適宜修正を行った。解答法は、本来2件法であるが、質問文が微妙であることを考慮して4件法とし、安易な解答態度を防止するため、「どちらでもない」とする中点を意図的に除外した。同一性を方向づける肯定的な反応に4点、否定的な反応に1点として得点化を行った。EIS は、男子68名、女子66名に個別で行われた。得られた得点分布は、男子が146点から255点まで (平均値は206.29, 標準偏差は20.00), 女子が158点から255点まで (平均値は203.14, 標準偏差は16.80) であり、正規性の検定は試みていないが、ほぼ正規分布と見なせるものであった。男女間に有意な得点差は認められない。これらの分布に基づいて、男女別々に、第一四分位数と第三四分位数が求められた。第一四分位数は、男女それぞれ、191, 192であり、第三四分位数は、221, 216であり、比較的近似した値といえる。

親密性地位面接 Schiedel & Marcia (1985) や Tesch & Whitbourne (1982) の親密性地位面接の項目を参考にして、「友情」と「交際」の2領域からなる面接項目が作成された。前者は「最も親しい同性の友人 (例えば親友) との関係」に関連する面接項目、後者は「おつきあひする異性との関係」に関連する面接項目である*。

親密性地位の評定は、Orlofsky et al (1973) の提唱した3つの基準に準拠して行われた。時間的継続性と質問項目の「影響内容」や「相手との関係に対する認識」、

* これらの面接項目の詳細については、筆者に問い合わせられたい。

「自己にとっての相手の存在の意味」などを基に、自己の気持の解放性、関係への自我関与度などの質的次元を通して、相手への傾倒が評定されることにより、親密性地位が決定された。親密性の全体的評定において、性的関係が非性的関係より重みづけられた。

評定の信頼性は、2名の独立した評定者間の一致度によって検討した。評定の一致した割合は、88.3%であった。評定者は、同一性地位の評定者と同一である。先行研究は75%~95%の一致を報告しているので、本研究の信頼性は、比較的高い一致率といえる。評定が不一致の扱いは、同一性地位の評定と同一である。

3. 手続

個別に EIS を配布して記入を依頼し、3、4日後、回収して採点し、前述の第一四分位数以下と第三四分位数以上の得点の者に被面接者の依頼を行った（興味深いことに、低得点者のなかにも、面接の依頼に対する拒否が若干認められた）。面接の依頼の1週間前後に、被面接者の調整のつく日に面接日を設定し、同一性地位面接と親密性地位面接が、この順で行われた。両面接に要する時間は、45~70分ほどである。面接の内容は、テープレコーダーに録音され、後に評定に用いられた。

4. 実施時期 1985年9月から12月までである。

結 果

1. 併存的妥当性の検討

EIS 得点の高・低群間における各領域及び全体の同一性地位を、男女別に、整理したのが TABLE 1 である。高・低群間の各領域及び全体の地位比較のため、男子では4(同一性地位)×2(高・低群)、女子では3(同一性地位)×2(高・低群)分子による直接確率法の統計的検定を行った。男子では、職業 ($P=1.0559 \times 10^{-3}$)、価値観 ($P=1.6754 \times 10^{-3}$)、性役割 ($P=4.8724 \times 10^{-3}$) のいずれの領域でも、高・低群間の地位分布に有意な差異が認められ、全体的地位においても有意な差異 ($P=1.4079 \times 10^{-4}$) が認められた。女子では男子と同様に、職業 ($P=9.5308 \times 10^{-3}$)、価値観 ($P=1.9359 \times 10^{-4}$)、性役割 ($P=6.3886 \times 10^{-3}$) のいずれの領域でも、高・低群間の地位分布に有意な差異が認められ、全体的地位においても有意な差異 ($P=4.0562 \times 10^{-3}$) が認められた。性役割の領域を除き職業と価値観の領域及び全体の地位において、男女共通に、高群は同一性達成の者が最も多く、低群では早期完了の者が最も多い。また、同一性拡散の者は、男子の高群に皆無であるが、男子の低群にはいずれの領域及び全体的地位に

TABLE 1 Proportions and Frequencies of Males and Females in Identity Status for High and Low Groups in EIS Scores

Category	Identity Status			
	Achievement	Moratorium	Foreclosure	Diffusion
Male				
Occupation				
High	.73 (11)	.20 (3)	.07 (1)	
Low	.27 (4)	.20 (3)	.33 (5)	.20 (3)
Value				
High	.80 (12)		.20 (3)	
Low	.33 (5)	.07 (1)	.33 (5)	.27 (4)
Sex Role				
High	.13 (2)	.13 (2)	.73 (11)	
Low		.20 (3)	.53 (8)	.27 (4)
Overall				
High	.73 (11)	.13 (2)	.13 (2)	
Low	.13 (2)	.33 (3)	.47 (6)	.07 (4)
Female				
Occupation				
High	.60 (9)	.20 (3)	.20 (3)	
Low	.20 (3)	.33 (5)	.47 (7)	
Value				
High	.80 (12)	.13 (2)	.07 (1)	
Low	.20 (3)	.13 (2)	.67 (10)	
Sex Role				
High	.47 (7)		.53 (8)	
Low	.27 (4)	.33 (5)	.40 (6)	
Overall				
High	.67 (10)	.13 (2)	.20 (3)	
Low	.20 (3)	.20 (3)	.60 (9)	

Note. Number in decimal form indicate proportions, whereas those in parentheses indicate frequencies.

においても散見されている。

2. 同一性地位の性差

男・女間の同一性地位の比較のため、高群では3(同一性地位)×2(男・女)、低群では4(同一性地位)×2(男・女)分子による直接確率法の統計的検定を行った。高群では、職業 ($P=.0866$) と価値観 ($P=.0690$) の領域で男・女間の地位分布に有意な差異が認められないが、性役割 ($P=.0175$) の領域においてのみ、有意な差異が認められた。全体的地位においては、有意な差異 ($P=.1364$) が認められなかった。高群では、性役割の領域を除く領域及び全体的な地位において、男女とも同一性達成の者が多い。性役割の領域において、男子は早期完了の者が著しく多いが、女子は同一性達成か早期完了かの双峰分布を示している。低群では、職業 ($P=.0100$)、価値観 ($P=.0032$)、性役割 ($P=1.0841 \times 10^{-3}$) のいずれの領域でも男・女間の地位分布に有意な差異が認められ、全体的地位においても、有意な差異 ($P=6.4531 \times 10^{-3}$) が認められた。低群では、いずれの領域でも全体的な地位においても、男女共通に早期完了の者が最も多いが、男子においてのみ、同一性拡散の者が認められた。

3. 各領域の同一性地位と全体的同一性地位との関連

EIS 得点の高群・低群間で、男女それぞれ、各領域及び全体的な同一性地位分布に有意な差異が認められているが、各領域の地位と全体的地位との関連の性差を検討するために、高・低群を無視して男女別に集計が行われた。引き続き、統計的検定の要請のため、各同一性地位は高い地位（同一性達成とモラトリアム）と低い地位（早期完了と同一性拡散）の2群に圧縮された。各領域の地位と全体的地位との関連は、 2×2 分子の直接確率法によって検討が行われた。男子では、価値観 ($P=1.1674 \times 10^{-4}$)、性役割 ($P=.0156$) の領域において有意な関連が

TABLE 2 Frequencies of Males and Females for High and Low Groups in EIS Scores by Principled Values

Principled Value	Male		Female	
	High	Low	High	Low
Self-actualization	7	2	9	2
Exploration of values	4	4	4	4
Interpersonal relationship	3	2	1	5
Others	1	3	1	4

認められたが、職業においては認められなかった。有意な関連が認められた領域について連関係数を求めたところ、価値観では .7222、性役割では .4504の値が得られた。女子では、職業 ($P=2.5207 \times 10^{-3}$)、価値観 ($P=2.1747 \times 10^{-3}$) の領域でも有意な関連が認められたが、性役割においては認められなかった。有意な関連が認められた領域について連関係数を求めたところ、職業では .5774、価値観では .7907の値が得られた。男女とも、価値観の領域での連関係数が最も高く、価値観の領域での地位が全体的地位と最も高く関連している。

4. 価値観の内容

価値観の領域での地位と全体的地位との連関係数が最も高いため、価値観の内容を、無藤 (1979) を参考にし、自己実現、価値観の追求、対人関係、その他の4つに分け、男女別、EIS 得点の高・低群別に整理したのが TABLE 2 である。男女別に高・低群間の価値観の内容比較のため、対人関係・その他を1つの群に圧縮し、3 (価値観の内容) \times 2 (高・低群) 分子による直接確率法の統計的検定を行った。男女とも、それぞれ高・低群間に、 $P=.0116$ 、 $P=1.3650 \times 10^{-3}$ の危険率で有意な差異が認められた。高群は自己実現が多く、低群は対人関係とその他が多い。さらに、価値観の内容の性差比較のため、高・低群別に、3 \times 2 (男・女) 分子による直接確率法の統計的検定を行った。高・低群共

通に、男女間で有意な差異は認められなかった。価値観の内容は、被面接者の性に関係がなく、EIS の得点の高低に関係しており、高群は自己実現が多く、低群は対人関係・その他が多い。

5. 高・低群の親密性地位とその性差

EIS 得点の高群・低群間における親密性地位を、男女別に、整理したのが TABLE 3 である。高・低群別、男女別のいずれの群にも、孤立の地位の者は認められなかった。高・低群間の親密性地位の比較のため、男女別に、4 (親密性地位) \times 2 (高・低群) 分子による直接確率法の統計的検定を行った。男女とも、それぞれ、 $P=6.4531 \times 10^{-3}$ 、 $P=7.9097 \times 10^{-3}$ の危険率で高・低群間に有意な差異が認められた。男子は、高群に親密性や前親密性の地位の者が多いが、低群に偽親密性やステレオタイプの地位の者が多い。女子は、高群に親密性の地位の者が多いが、低群に前親密性の地位の者が多い。

高・低群間で、男女それぞれ、親密性地位分布に有意な差異が認められたが、親密性地位分布の性差を検討するため、男女別に、高・低群が1群にまとめられて集計された。4 (親密性地位) \times 2 (男・女) 分子による直接確率法の統計的検定を行ったところ、 $P=3.3756 \times 10^{-4}$ の危険率で有意な差異が認められた。男子は、前親密性の者が最も多く、ついでステレオタイプの者が続くが、女子は親密性と前親密性の者として折半されている。

6. 各領域及び全体の同一性地位と親密性地位との関連

高・低群間で、男女それぞれ、親密性地位分布に有意な差異が認められたが、各領域の同一性地位と親密性地位との関連の性差検討のため、高・低群を無視して男女別に集計が行われた。各領域の同一性地位及び全体的同一性地位と親密性地位との関連を、男女別に、整理したのが TABLE 4 である。統計的検討の要請のため、同一性地位と親密性地位は、それぞれ、高い同一性地位と低い同一性地位、高い親密性地位 (親密性と前親密性) と低い親密性地位 (偽親密性とステレオタイプ) の2群に圧縮

TABLE 3 Proportions and Frequencies of Males and Females in Intimacy Status for High and Low Groups in EIS Scores

Category	Intimacy Status			
	Intimate	Preintimate	Pseudointimate	Stereotyped Isolate
Male				
High	.27 (4)	.67 (10)		.07 (1)
Low	.07 (1)	.20 (3)	.33 (5)	.40 (6)
Female				
High	.60 (9)	.40 (6)		
Low	.27 (4)	.47 (7)	.20 (3)	.07 (1)

Note. Number in decimal form indicate proportions, whereas those in parentheses indicate frequencies.

された。連関の検討は、男女別に、2(同一性地位)×2(親密性地位)分子による直接確率法の統計的検定を行った。男子では、価値観の領域及び全体的な同一性地位がそれぞれ、 $P=2.0755 \times 10^{-3}$, $P=.0215$ の危険率で親密性地位と有意な連関が認められた。有意な連関が認められた領域について連関係数を求めたところ、価値観では.5833, 全体では.4330の値が得られた。しかし、女子ではいずれの領域及び全体の同一性地位も親密性地位と有意な連関が認められなかった。

考 察

1. 併存的妥当性の検討

併存的妥当性の考察に入る前に、本結果で得られた同一性地位分布を検討する。本結果で得られた地位分布が他の研究結果と著しい差異が示されるならば、併存的妥当性を考察する以前に、本研究で用いた同一性地位面接の内容的妥当性の問題が浮上するからである。3領域を総合した全体的な同一性地位をとりあげるならば、本邦で同一性地位アプローチの先鞭をなした無藤(1979)は、3, 4年の男子大学生63名を対象に、同一性達成が29名、モラトリアムが4名、早期完了が20名、同一性拡散が10名の地位分布を見出している。本結果は、男女をこみにして、同一性達成が26名、モラトリアムが10名、早期完了が20名、同一性拡散が4名であった。本研究の被面接者の在籍年次は無藤と同一ではあるが、被面接者が無作為に母集団から選択された者より構成されていなく、しかも男子だけでなく女子をも対象とし、用いられた面接領域も一部異なるため、無藤の結果と同一線上で論じられないが、モラトリアムと同一性拡散の分布が逆転していることを除き、比較的近似した結果が得られており、高い内容的妥当性が示されたものと考えられる。

本研究では、併存的妥当性の検討のため、EISを用いた。男女とも、EISの高群と低群の間に、差異が見出された。高群は、男女共通に性役割の領域を除き(同一性地

TABLE 4 Frequencies of Males and Females on Intimacy Status by Identity Area

Identity Area	Intimacy Status				
	Intimate	Preintimate	Pseudointimate	Stereotyped	Isolate
Male					
Occupation					
Achievement	2	10	1	2	
Moratorium	1	2		3	
Foreclosure	2	1	2	1	
Diffusion			2	1	
Value					
Achievement	5	10	1	1	
Moratorium				1	
Foreclosure		3	1	4	
Diffusion			3	1	
Sex role					
Achievement		2			
Moratorium	1	1		3	
Foreclosure	4	9	3	3	
Diffusion		1	2	1	
Overall					
Achievement	3	9		1	
Moratorium	1	2	2	2	
Foreclosure	1	2	3	3	
Diffusion				1	
Female					
Occupation					
Achievement	6	6			
Moratorium	5	2		1	
Foreclosure	2	5	3		
Diffusion					
Value					
Achievement	9	6			
Moratorium	1	2		1	
Foreclosure	3	5	2	1	
Diffusion					
Sex role					
Achievement	5	5	1		
Moratorium	2	1	1	1	
Foreclosure	6	7	1		
Diffusion					
Overall					
Achievement	6	7			
Moratorium	3	1	1		
Foreclosure	4	5	2	1	
Diffusion					

位の性差で後述)、同一性達成の者が最も多い。低群は、同一性達成の者が3分の1以下であり、早期完了が最も多い。同一性地位の側から述べるならば、同一性達成、早期完了と評定される者は、それぞれEISで高得点、低得点であることが多い。この同一性地位とEISの得点との関係は、男子のみでなく女子も妥当しており、同一性地位に対する高い併存的妥当性が得られたものと考えられる。

しかし、少数ではあるが、高群に早期完了や、低群に同一性達成が認められている。この理由として、少なくとも以下の2つの問題が考えられる。1つは、EISの得

点と同一性地位との乖離が認められた被面接者の精査である。乖離の多くは、同一性達成が低群に少なからず見出されたことによる。乖離の理由の一部として、面接の持つ援助機能に影響を受けたことが考えられる。地位面接は半構造的に規定されているが、面接者が追求質問 (probe) を工夫することにより、被面接者が自分の世界を表現し面接者に伝える能力を高めるという援助機能を内在させている。面接の援助機能が、被面接者の話す能力を拡大し高い同一性地位の評定を受けたのではないかと考えられる。2つは、EISが発達図式のIからVI段階までの内容を尺度化したものであるが、地位面接の領域との関係が必ずしも明らかでない。さらに本研究の被面接者は、V段階だけの尺度得点からではなく、IからVI段階までの尺度の総得点から選ばれている。現状の地位面接は、Bourne (1978) が指摘する同一性概念の7つの性質を十分反映してせず、むしろ青年が現在体験しつつある同一性の主観的・意識的な感覚や同一性危機への対処行動様式を反映させている。この意味で、V段階の尺度だけで検討する方が一貫した結果を生む可能性を残している。

2. 同一性地位の性差

高群における男女間の比較は、職業や価値観の領域及び全体での地位に性差は見出されないが、性役割の領域においてのみ差異が見出されている。女子は、同一性達成と早期完了の双峰分布を示すが、男子は早期完了が著しく多い。低群の男女間の比較は、いずれの領域でも全体でも地位に性差が認められ、女子が男子より高い地位の者が多い。性役割の領域においては、高・低群問わず、男女間に性差が認められ、EIS得点の高低の要因より生物的な性の所与が大きい。男子は、性役割の領域に関する質問の冒頭で、高・低群問わず、「性役割って何ですか」と問い返すことが多数認められた。他の領域では面接者の聴き出したいことを一個の質問から連鎖的・自発的に答える被面接者も、性役割の領域に限って一個一個の質問に答えるという形式が少なくない。男子は、性役割をあまりに自明すぎて考えたことがないという感想が多い。他方女子は、問い返すことは稀有であり、社会が求める女性性の役割の受容・反発のいかんを問わず、絶えず意識されている領域であることが見出された。Waterman & Nevid (1977) は、職業やイデオロギーの領域では性差が見出されないが、性役割の領域で性差を見出している。彼女らは、男子では危機体験の者は少なく (27%)、女子では危機体験の者が多い (54%) と述べている。本結果は、性役割の危機を体験している男女がそれぞれ24%、53%であり、Waterman & Nevidの値

と酷似している。同一性の形成過程の性差を考えた場合、女性にとり性役割は葛藤領域であることを示唆している。

男女間で同一性の確立がどの領域で重要であるかを、各領域の同一性地位と全体的同一性地位との連関により検討した場合、価値観の領域での地位が、男女共通に、全体的地位と最も高い連関を示したが、性役割の同一性地位は、女子において連関が見出されなかった。男女とも、価値観の領域での同一性確立が最も重要であると考えられる。Waterman & Waterman (1971), Waterman et al (1974) らは、縦断的研究により、職業の同一性地位が他の領域の同一性地位を先導することを示している。Rogow et al (1983) は、各領域の地位と全体的地位との連関を検討し、最も高いのが宗教であり、最も低いのが職業であることを見出した。本研究の結果は、宗教の領域を含まないため、比較できる研究を持たないが、Rogow et al の宗教を本研究の価値観の領域に読み代えるならば、Rogow et al の結果に部分的支持を与えている。佐方・中西 (1985) は、価値観の確立に続いて職業的同一性が達成されると考えているが、本結果はこれを検証している。

価値観の領域での地位が全体的地位と最も高く連関したため、高低群別、男女別に、価値観の内容を検討したところ、男子、女子それぞれの高・低群間に差異が見出されたが、高群、低群それぞれの男・女間に差異は見出されなかった。男女共通に、高群は自己実現の内容の者が多く、低群は対人関係・その他が多い。男女の同一性発達の主な問題を検討した先行研究は、男子は同一性の agency (個人内) 的側面、女子は同一性の communion (個人間) 的な側面が重要であることを提唱してきている (Josselson, 1977a, 1977b)。しかし、本結果は、高群の男子だけでなく高群の女子も対人関係志向ではなく自己達成志向を持つ者が多い。また、低群の女子だけでなく低群の男子も、対人関係志向が多い。価値観の内容は、旧来指摘されているような被面接者の生物学的な性の所与に規定されるのではなく、EISの得点の高低に反映される、同一性の確立の度合に規定されることを示している。

本結果は、女子において、性役割の同一性地位と全体的同一性地位との連関が見出されなかった。しかし、女子は性役割の領域において男子より同一性危機を体験している者が多い。これらの結果を勘案すると、女子の同一性形成において性役割の領域を看過できないが、Erikson (1968) が提唱するように、性役割が職業や政治、宗教を凌駕するほど重要な領域でもないように思われる。

本研究では、領域別に同一性地位をとりだし、全体的な同一性地位との連関を検討したが、3領域を総合した

全体的同一性地位は何を意味しているのだろうか。自我同一性は、人格の固有の成長・統合傾向を持つ全体的な体制である。しかし、同一性の確立の程度を同一性地位面接でとらえようとする立場は、この「全体」的な体制をとらえようとする視座と、背反する部分を内在している。同一性地位面接は、そこで指定された特定の次元に着目し、個人の属性を記述するものである。したがって、そこで記述される個人像は、限りなく全体的体制に近似しているが、本質的に「部分」に着目した構成概念であり、全体的同一性地位といえども「部分」的な全体の構成概念である。しかも、全体的同一性地位は、領域の同一性地位を構成要素としてではなく、力動的構造の指標として演繹された構成概念である。同一性地位面接は、記述上の方法的制約から部分に着目せざるをえない。自我同一性の概念は、全体的体制をとらえようとする、臨床実践と結びついた自我心理学を背景にしている。この背反した立場を止揚していくには、全体的同一性地位が各領域の同一性地位を指標とした「部分」的な全体であり、全体的体制としての自我同一性と懸隔があることの認識が出発点であろう。

3. 親密性地位の性差

親密性地位は、男女それぞれ、高・低群間で検討した場合、高・低群間に差異が見出され、男女とも、高群は低群より高い地位の者が多い。本結果は、男子だけでなく女子においても、Erikson (1968) の同一性の確立が親密性の達成の前提となるという一般的な仮説を検証している。また、高・低群を1群にまとめた男・女間にも差異が見出され、女子は男子より高い地位の者が多い。この結果は、女子が男子より親密性地位が高いとする Josselson (1973), Hodgson & Ficher (1979), Schiedel & Marcia (1985) の結果と一致しており、女性の社会人としての役割の要請が対人関係の強調であることを反映していると考えられる。

4. 同一性地位と親密性地位との連関の性差

各領域及び全体の同一性地位と親密性地位との連関を男女別に検討したところ、男子では価値観の領域と全体での同一性地位が親密性地位と連関するが、女子ではいずれの領域及び全体での同一性地位も連関が見出されなかった。先行研究において、領域別の同一性地位と親密性地位との連関を検討したものは少なく、僅かに Kacer-guis & Adams (1980) と Fitch & Adams (1983) の研究が認められるのみである。多数の先行研究は、全体的同一性地位において、男子では、同一性を確立することによって親密性の達成に向け進展しうる結果を示している (Orlofsky et al, 1973 ; Orlofsky, 1976 ; Tesch & Whitbourne,

1982 ; Schiedel & Marcia, 1985)。本結果は、男子の全体的な同一性地位と親密性地位との連関を示している先行研究と一致するが、領域別の同一性地位と親密性地位とを関連された研究結果をいずれも支持するものでない。

本結果において、女子では連関が見出されなかった。同一性地位と親密性地位との連関を検討した先行研究は、Josselson (1973) が事例的な研究を行い、女性の同一性形成が親密性形成と並行すると述べ、Schiedel & Marcia (1985) は同一性地位と親密性地位との連関を見出していない。本結果は、これらの先行研究の結果と一致するものであり、女子では同一性地位の高低と親密性地位の高低とが関連なく進展することを示している。さらに女子は、男子の同一性形成と親密性形成との直線的な関係と異なり、複雑な様相を呈する。女子は同一性地位の高低が親密性地位の高低と関係なく、しかも女子は男子より親密性地位が高いことなどから、女子は男子より一般に親密性の形成が進展しているが、高群が低群より親密性地位が高いことを考慮すると、女子といえども同一性と全く無関係に親密性が進展するのではなく、男子ほど確固としないにせよ、ある程度の同一性確立の必要性を示唆するものと考えられる。

今後の課題として、本研究は同一性地位の性差を検討課題としながら、同一性地位面接の併存的妥当性の検討をも意図したため、EIS 得点の中位の者を排除する中で性差の検討を試みている。本来、性差の検討が目的ならば、無作為に抽出された被面接者をもとに分析が行われるべきである。この意味で、本結果は最終的なものではなく、将来の研究を方向づける1つの試みである。さらに、本研究の被面接者の標本サイズとその特性を考慮したとき、本研究で得られた知見を繰り返すことが必要と考えられる。また、親密性地位は、本来、男子青年の対人関係の型の記述を目的に開発されたものであるため、親密性地位を女性に適應するさいの妥当性への疑問が提起されてきている。最後に、方法の手續において面接者が事前に被面接者の EIS 得点を知り得ており、実験者の「期待効果」が混入している可能性が考えられる。今後、これらの問題点を考慮しながら一層の検討が必要であろう。

引用文献

- Adams, G.R., Shea, J., & Fitch, S.A. 1979 Toward the development of an Objective Assessment of ego identity status. *Journal of Youth and Adolescence*, Vol. 8, 223—237.
- Bourne, E. 1978 The state of research on ego identity : A review and appraisal. Part 1. *Journal of Youth and Adolescence*, Vol. 7, 223—251.

- Erikson, E.H. 1956 The problem of ego identity. *Journal of American Psychoanalytic association*, Vol. 4, 56—121.
- Erikson, E.H. 1963 *Childhood and Society*. (2nd ed.). New York: Norton, 250—284.
- Erikson, E.H. 1968 *Identity: Youth and crisis*. New York: Norton, 9—283.
- Fitch, S.A., & Adams, G.R. 1983 Ego identity and intimacy status: Replication and extension. *Developmental Psychology*, Vol. 19, 839—845.
- Ginsburg, S.D., & Orlofsky, J.L. 1981 Ego identity, ego development, and locus of control in college women. *Journal of Youth and Adolescence*, Vol. 10, 297—307.
- 平野潔・宮下一博 1981 Rasmussenの自我同一性の検討(I)(II) 中国四国心理学会論文集, 14, 48—49.
- Hodgson, J.W., & Fischer, J.L. 1979 Sex differences in identity and intimacy development in college youth. *Journal of Youth and Adolescence*, Vol. 8, 37—50.
- Josselson, R.L. 1973 Psychodynamic aspects of identity formation in college women. *Journal of Youth and Adolescence*, Vol. 2, 3—52.
- Josselson, R.L., Greenberger, E., & McConochi, D. 1977a Phenomenological aspects of psychological maturity in adolescence. Part 1: Boys. *Journal of Youth and Adolescence*, Vol. 6, 25—55.
- Josselson, R.L., Greenberger, E., & McConochi, D. 1977b Phenomenological aspects of psychological maturity in adolescence. Part 2: Girls. *Journal of Youth and Adolescence*, Vol. 6, 145—167.
- Kacerguis, M.A., & Adams, G.R. 1980 Erikson stage resolution: The relationship between identity and intimacy. *Journal of Youth and Adolescence*, Vol. 9, 117—126.
- 加藤厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, Vol. 31, 20—30.
- 加藤厚 1986 同一性測定における2アプローチの比較検討 心理学研究, Vol. 56, 357—360.
- Marcia, J.E. 1966 Development and validation of ego identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 3, 551—558.
- Marcia, J.E., & Friedman, M.L. 1970 Ego identity status in college women. *Journal of Personality*, Vol. 38, 249—263.
- Matteson, D.R. 1977 Exploration and commitment: Sex differences and methodological problems in the use of identity status categories. *Journal of Youth and Adolescence*, Vol. 6, 353—374.
- 無藤清子 1979 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性 教育心理学研究 Vol. 27, 178—187.
- Orlofsky, J.L. 1976 Intimacy status: Relationship to interpersonal perception. *Journal of Youth and Adolescence*, Vol. 5, 73—88.
- Orlofsky, J.L. 1978 Identity formation, achievement, and fear of success in college men and women. *Journal of Youth and Adolescence*, Vol. 7, 49—62.
- Orlofsky, J.L., & Ginsburg, S.D. 1981 Intimacy status: Relationship to affect cognition. *Adolescence*, Vol. 16, 91—100.
- Orlofsky, J.L., Marcia, J.E., Lesser, I.M. 1973 Ego identity status and intimacy vs. isolation crisis in young adulthood. *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 27, 211—219.
- Rasmussen, J.E. 1964 Relationship of ego identity to psychosocial effectiveness. *Psychological Reports*, Vol. 15, 515—525.
- Read, D., Adams, G.R., Dobson, W.R. 1984 Ego identity status, personality, and social influence style. *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 46, 169—177.
- Rogow, A.M., Marcia, J.E. & Slugoski, B.R. 1983 The relative importance of identity status interview components. *Journal of Youth and Adolescence*, Vol. 12, 387—400.
- 佐方哲彦 1985 子ども時代の同一性形成と青年期における同一性地位の発達 中西信男・水野正憲・古市裕一・佐方哲彦「アイデンティティの心理」有斐閣
- Schenkel, S., & Marcia, J.E. 1972 Attitudes toward premarital intercourse in determining ego identity status in college women. *Journal of Personality*, Vol. 3, 472—482.
- Schiedel, D.G., & Marcia, J.E. 1985 Ego identity, intimacy, sex role orientation, and gender. *Developmental Psychology*, Vol. 21, 149—160.
- 高橋裕行 1984 自我同一性と Marcia の同一性地位面接: 批評的展望 教育心理学研究 Vol. 32, 320—328.
- 高橋裕行・関口昇 1986 女子大学生における自我同一性と親密性の発達の研究 福井大学教育学部紀要 教育科学, Vol. 36, 99—119.
- Tesch, S.A., & Whitbourne, S.K. 1982 Intimacy and identity status in young adults. *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 43, 1041—1051.
- Waterman, A.S. 1982 Identity development from adolescence to adulthood: An extension of theory and a review of research. *Developmental Psychology*, Vol. 18, 341—358.
- Waterman, A.S., & Waterman, C.K. 1971 A longitudinal study of changes in ego identity status during freshman year at college. *Developmental Psychology*, Vol. 5, 167—173.
- Waterman, A.S., Geary, P.S., & Waterman, C.K. 1974 A longitudinal study of changes in ego identity status from freshman to the senior year at college. *Developmental Psychology*, Vol. 10, 387—392.
- Waterman, C.K., & Nevid, J.S. 1977 Sex differences in the resolution of identity crisis. *Journal of Youth and Adolescence*, Vol. 6, 337—342.
- 芳川玲子・園田雅代 1985 女子大学生の自我同一性・親密性: <II> 親密性地位面接及び追跡調査からみた自我同一性と親密性との関連 日本教育心理学会第27回総会発表論文集 58—59.

(1987年8月26日受稿)